

みんなどんなことやっているの？

障害者による文化芸術活動をもっと広げる8つの取組事例集

2024年3月31日 発行：NPO 法人ドネルモ

本書は、令和5年度障害者総合福祉推進事業「障害者による文化芸術活動の幅広い活動を支援するための現状調査と研究」の成果として作成しています。



目次

はじめに 1

事例集の作成手順と要点 2

事例 1：宮城県

障害のある人とともに創造するファシリテーターを育成

パフォーミング・アーツ活動を支援する人材の掘り起こしとネットワーク化 4

事例 2：福島県

障害のある作家と美術館が企画段階からともに作り上げた展覧会

「わたしがつくる森陽香美術館」 6

事例 3：千葉県

福祉施設、大学、美術家による連携を通じて地域の交流・人材育成が促進 若い世代へアプローチ

「風のアール・ブリュット ココロ・ポリリズム JIU」 8

事例 4：山梨県

要所に関わる「ピンポイントの伴走支援」で実行委員会の主体的・継続的な活動を後押し

「フレンズアート展」 10

事例 5：岐阜県

作品の二次利用の新たな可能性を開拓 社会的・経済的循環を目指す試み

「tomoni あたらしいものづくり [Make with 2023]」 12

事例 6：高知県

障害の有無にかかわらず参加できる、アンデパンダン形式のユニークな場づくり

「藁工アンパン アートバザール」 14

事例 7：福岡県

芸術と福祉の分野をつなぐ 現場での研修を通じた顔の見える関係づくり

「芸術×福祉 九州ネットワーク会議」 16

事例 8：宮崎県

小さな気付きからはじまった、多様な主体との協働による 5 年間のチャレンジ

「視覚障がいと鑑賞について」(対話型アート鑑賞ガイドの作成) 18

取組事例の特徴、おわりに 20

はじめに

「障害者による文化芸術活動をもっと広げる 8 つの取組事例集」は、令和 5 年 3 月に策定された「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画（第 2 期）」の期間中に念頭に置くべき方向性を検討するとともに、それを踏まえて、障害者芸術文化活動普及支援事業の実施団体や障害福祉施設などに対して、今後の障害者による文化芸術に関する取組のヒントやノウハウを提供することを目的としています。

この事例集に紹介する取組では、なるべく地域での多様な主体とさまざまな関わりが生まれて、多面的な成果が期待できる取組を紹介しています。ただし、それらは、必ずしも「成功事例」というわけではありません。各取組は、それぞれに様々な悩みや課題、制約を抱えながら試行錯誤を繰り返しています。こうした取組を知っていたことで、自分たちの地域で取り組んでいる課題の参考となり、今後の展開のヒントを得ることができるでしょう。一方で、単にそれらの取組をそのまま模倣するのではなく、自分たちの地域に合った形で活用、工夫することも重要です。

全国各地でさまざまな活動や支援が広がる中、この事例集がそれぞれの地域の特色を活かした最善の方法を見つけ出すきっかけにつながれば幸いです。

NPO 法人ドネルモ

事例集の作成手順と要点

この事例集は、令和5年度障害者総合福祉推進事業「障害者による文化芸術活動の幅広い活動を支援するための現状調査と研究」の成果物です。本調査研究では、第1期の「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」（以下、基本計画）での障害者芸術文化活動普及支援事業（以下、普及支援事業）を振り返り、第2期の基本計画期間中に念頭に置くべき方向性を検討しました。それを踏まえて、普及支援事業の実施団体や障害福祉施設などに対して、今後の障害者による文化芸術に関する取組のヒントやノウハウを提供することを目的としています。

取組の調査にあたっては、第2期の基本計画で示された3つの目標（目標1：障害者による幅広い文化芸術活動の更なる促進や展開／目標2：文化施設及び福祉施設等をはじめとした関係団体・機関等の連携等による、障害者が文化芸術に親しみ、参加する機会等の充実／目標3：地域における障害者による文化芸術活動の推進体制の構築）に向けての参考となるよう努めました。調査は以下の手順で行いました。

- 平成29年度から令和4年度までの「障害者芸術文化活動普及支援事業報告書」に掲載のある取組事例のデータ227件の内容の整理と現状の分析（文献調査）
- 令和5年度の普及支援事業の実施団体を対象としたアンケートによる100事例の基本情報を収集（アンケート調査）
- 普及支援事業の広域センターに第2期の基本計画中に求められる取組の方向性について意見を聴取
- 広域センターへのヒアリング結果を元に、アンケート調査の100事例から24事例を抽出、基本計画の11の施策との関連性、なるべく多様な関係者（ステークホルダー）をカバーすることなどを考慮した事例候補のリストを作成
- 障害者の文化芸術活動に関わる有識者からの意見を踏まえ、事例集に紹介する取組の8事例の関係者にヒアリング

文献調査とアンケート調査からは、第1期の基本計画の期間中に、確実に多様な取組が広がってきていることがわかりました。基本計画で示されている11項目の施策のうち、初期の段階では「3. 作品等の発表の機会の確保（発表）」が多かった取組が、経験の蓄積とともに「9. 人材の育成等（人材育成）」や「11. 関係者の連携協力（連携協力）」などの施策と連動し、ネットワークを広げるきっかけとなっていました。

そこで、事例集に紹介する取組では、なるべく地域での多様な主体とさまざまな関わりが生まれて、多面的な成果が期待できる取組を紹介するよう心がけました。紹介したい取組が数多くある中で、紙面の制約や、地域・関連施策とのバランスを考慮して、8事例を選択しました。

8事例のヒアリングは事例ごとにグループインタビュー形式で行い、共通の質問項目（取組の概要、きっかけや背景、取組によって生まれたことや変化、取組を通じて見えたことや感じたこと）について意見を伺いました。なお、事例のヒアリングを通じて、大事にしたいと考えた要点は下記の4点です。

- 異なる組織や立場との連携・協働での関わり方や、それぞれの立ち位置から見える成果や課題の多面性
- 取組の結果だけではなく、始めたきっかけ、活動のプロセス、活動後の振り返りなどの推移や変化
- 実施団体の組織や予算の規模の違い、経験や実績の蓄積量などの違いを越えて、他団体が参考にできること
- 継続的・中長期的に取り組むことで見えたことや、現時点では成果が見えにくいことでも今後の参考にできること

以上のような作成手順と要点を踏まえながら、8つの取組事例を紹介します。

障害のある人とともに創造するファシリテーターを育成

パフォーミング・アーツ活動を支援する人材の掘り起こしとネットワーク化

事例概要

- 主催団体** 障害者芸術活動支援センター@宮城 SOUP (以下、SOUP)
- 連携団体** 南東北・北関東ブロック広域センター、ミュージックカンパニー、さぐる・おどる企画、人形劇団ポンコレラ

11の施策との関連性										
鑑賞	創造	発表	評価	権利保護	販売	交流	相談	人材育成	情報収集	連携協力
○		○				○	○	◎		

取組の概要

●きっかけ

障害のある人が文化芸術に関わる活動を始める時、まだその選択肢の数が多いとは言えません。SOUPでは、障害のある人が参加できる場をまちなかに増やし、活動の選択肢も増やすことを目的に、特に美術や創作に関わる活動に比べて取組の少なかったパフォーミング・アーツ分野の障害のある人の活動を支援する人材の掘り起こしと、ネットワーク化に取り組んでいます。パフォーミング・アーツを対象としたのは、練習・発表の場を開かれた場とし、多様な人々が参加・鑑賞することで相互理解を深めようとしたためです。

●内容

SOUPは南東北・北関東ブロック広域センターと連携し、障害のある人を含めたダンス活動を行う他、アート・プロジェクトの企画制作等に取り組むクリエイティブ・アート実行委員会(制作:ミュージックカンパニー)による公演を東京から招聘。障害のある人が参加するダンスを仙台で鑑賞する機会をつくりました。またワークショップを通じて、仙台市を中心にファシリテーターが育成される機会を創出。

「さぐるからだ、みるわたし」では、そのファシリテーター向けのワークショップに参加したことのある、さぐる・おどる企画の渋谷裕子さんをファシリテーターに、聴覚障害のある人も参加がしやすい、手話通訳付きダンスワークショップを開催。「みんなで作るよ 広場の人形劇!」では人形劇団ポンコレラの工藤夏海さんをファシリテーターに、演技・人形づくり・音楽など即興で好きなことに参加できる人形劇ワークショップを開催。どちらも障害の有無にかかわらず参加できるワークショップでした。SOUPでは、こうした障害のある人が主体的に関わることでできる活動の相談支援、資金準備、ネットワーク化などをおこなっています。



撮影:小田島万里

この取組において大切だった3つのポイント

●パフォーミング・アーツの特性を活かした

市街地に出向いて一堂に大勢に見てもらえる公演ができるので、多様な人々とのタッチポイントが増え、相互理解が深まると実感できた。参加者と時間を共有し、パフォーマンスをするまでの過程も大切にできた。

●支援者ではなく、仲間として接した

ファシリテーターは支援者ではなく、ダンスや人形劇をともに行う仲間として参加者に接した。指示に従ってもらうのではなく、参加者のできる・できない、やりたい・やりたくないを重視した。

●障害のある人とつくることで表現が広がった

障害のある人の一人ひとり異なる特性や身体性によって、想定していなかった展開や表現が生まれ、ダンスや人形劇などの可能性も広がった。新しいことに挑戦しようという気持ちにつながった。

🔍 関係者それぞれの気付きや変化

●ダンサー、振付師 渋谷裕子さん

「私たちは支援者ではなく、あくまでダンサーとして関わる」が私のテーマ。障害のあるダンサーの「支援者ではなく友達がほしい」「ダンス仲間がほしい」「普通に一緒に喋って踊りたい」のコトバにとっても共感しています。ファシリテーターは指示や指導を与える人ではなく、一人一人に「どう踊る？」と問いかけ、見守り、時には一緒に踊り合える仲間。そんな仲間がいる場を開いて、続けてくれるダンサーや振付師が増えてほしいです。

●美術家、人形劇団ボンコレラ、でもトラ！ 工藤夏海さん

ファシリテーターは参加者をプログラムに無理やり沿わせるのではなく、それぞれの参加者がやりたいことを察知し、セッティングすることが大切だと分かりました。予定が変わってしまっても、そこからアイデアやイメージーションが広がり、次につながることにワクワクできました。

●SOUP 高橋梨佳さん

パフォーミング・アーツはワークショップ、発表会と様々な状況で行えます。私がスタッフとして参加した「みんなでつくるよ広場の人形劇！」では商店街でパレードを開催しました。その様子を偶然居合わせた人が観て、障害のある人と出会うきっかけにもなったと思います。



📁 取組によって生まれた成果や今後に向けた課題

●場所と資金が圧倒的に足りないことを解決したい

NPO法人などの団体や支援者が熱量をもってボランティアで障害者支援を続けるには限界があります。行政機関はもちろん一般市民のみなさんにも興味や問題意識を持っていただき、活動場所や活動資金を確保していきたいです。

●障害のある人もファシリテーターになってほしい

ダンサーや美術家などのアーティストが、障害のある人との表現活動に関心を持ち、障害のある人が参加するワークショップのファシリテーターとして育っていくことが今回の目的。また将来的には障害のある参加者からファシリテーターが生まれることも期待されています。

障害のある作家と美術館が企画段階からともに作り上げた展覧会

「わたしがつくる森陽香美術館」

事例概要

主催団体 社会福祉法人安積愛育園 はじまりの美術館 unico

連携団体 地域生活サポートセンター パツソ

11の施策との関連性

鑑賞	創造	発表	評価	権利保護	販売	交流	相談	人材育成	情報収集	連携協力
	○	◎				○				○

取組の概要

●きっかけ

社会福祉法人安積愛育園で取り組む創作活動プロジェクトunico(ウーニコ、イタリア語で「唯一」「個性的」「ひとつ」という意味)では、毎回1名の作家を選抜し個展の開催と図録の発行・アーカイブをする「unico file」が2015年からスタート(不定期開催)しました。その4回目が、この「unico file vol.4 わたしがつくる森陽香美術館」です。

●内容

これまでのunicoの展覧会では、はじまりの美術館側が企画を立案して作家に依頼していましたが、今回は企画の段階から作家の森陽香さんと相談しながら、一緒に進めました。

森さんは脳性麻痺のため手足にこわばりがあり、絵を描くのは主に右足です。企画会議では、作家として活動を続けていくこと、多くの人に作品を知ってもらえることを願う森さんが、森陽香という「わたし」と、それを取り巻くたぐさんの「わたし(来場者、支援者など)」が関わり合い、思いを重ねていくことで実現する美術館を構想しました。

実施に当たっては、はじまりの美術館の館長の岡部兼芳さん、学芸員の大政愛さんが担当し、森さんが利用する郡山市の地域生活サポートセンター パツソのスタッフ鈴木愛理さんらも交えながら、森さんと一緒に個展のアイデアを考えました。

企画の構想にとどまらず、出展作品の約200点に関しても、森さんが作品の選定や展示構成の意見を出し、はじまりの美術館が実際の展示に落とし込んでいきました。作品展示だけでなく、公開制作、ライブドローイング、ポップアップショップなど、森さん自身のアイデアや意見を聞きながら企画が展開された結果、1,000人以上が来場しました。



この取組において大切だった3つのポイント

●障害のある作家の意志を尊重し、アイデアの実現に伴走

はじまりの美術館の岡部館長から森さんに企画段階からの参加を提案。パツソの鈴木さんをはじめ施設スタッフの協力もあり、森さん、はじまりの美術館、パツソのトライアングルがあって実現。

●公募展のような「枠」に捉われないアプローチ

公募展は多くの作家の創作のモチベーションになっているものの、応募作品の条件が決められていることも多い。森さんは「枠」に捉われずに表現できる個展を開催することが作家活動の目標だった。

●「どうしよう…」からはじめるアーカイブ

安積愛育園では、長年作品の保管環境の課題があった。「unico file」の中で作品のキャプションカード(作家名、年月日など)や作家ごとのドキュメントを作成し、保管の基準を考えてアーカイブしている。

🔍 関係者それぞれの気付きや変化

●作家 森陽香さん

これまで自分の意見を聞かれずに作品を展示されたことが、ないわけではありません。やはり意思疎通が難しい。この個展では、パツソの鈴木さんに自分の思いやアイデアを伝えて意図を汲んでもらい、パツソの協力で企画を作りあげる体制があったので「やります！」と言えました。

●地域生活サポートセンター パツソ スタッフ 鈴木愛理さん

森さんはずっと個展をやるのが夢だと言っていました。こんなに身近なところで夢をかなえた人がいて、貴重な体験でした。自分もパツソに入職するときからunicoの活動をやりたかったので、これは「私の仕事」だと思ったし、周りからの理解もありました。

●はじまりの美術館 支援センター事業担当 小林竜也さん

最初はunicoで生まれる作品を知ってほしいという思いで始めましたが、作品だけでは伝えられないことがあることに気づき、作家に着目しました。こうした取組は美術館だけでは無理で、鈴木さんのように普段から森さんたちとかわっている施設の支援者がいてはじめてできます。

●はじまりの美術館学芸員 大政愛さん

パツソは郡山市にあり、はじまりの美術館がある猪苗代町と1時間くらい離れていますが、そういう意味でもパツソのような活動を地域に伝えるハブになれるよう意識しています。普段、アートや美術館になじみのない方も「はじまりの美術館に行ってみよう」とさまざまな関心の入り口になってもらえると嬉しいです。



撮影 白土亮次

撮影 白土亮次

📌 取組によって生まれた成果や今後に向けた課題

●障害のある作家、障害福祉施設、美術館との濃密な協働

障害のある作家と、障害福祉施設のスタッフとの普段からの親密な信頼関係もあって、美術館との濃密な協働が実現し、「一緒につくる」という達成感がありました。

●作家自身の思いや意図を伝えるコミュニケーションの重要性

コミュニケーションに時間がかかることもありましたが、チラシや記録集制作のデザイナーとの打合せの際にも作家自身の思いや意図を伝えてもらえたことで、支援センター職員のアイディアを超えるものになりました。

福祉施設、大学、美術家による連携を通じて地域の交流・人材育成が促進 若い世代へアプローチ

「風のアール・ブリュット ココロ・ポリリズム」IU

事例概要

主催団体 城西国際大学、株式会社いろだま、社会福祉法人生活クラブ風の村(以下、風の村)

連携団体 風の村が運営する5つの障害児者福祉事業所(重心通所さくら、重心通所なりた、とんぼ舎さくら、スペースぴあ茂原、あかとんぼ飯野)

11の施策との関連性

鑑賞	創造	発表	評価	権利保護	販売	交流	相談	人材育成	情報収集	連携協力
	○	○				○		○		◎

取組の概要

●きっかけ

風の村は、高齢者、障害児者施設など千葉県内97事業所を運営しており、その内5箇所の障害児者福祉事業所で月に1~2回、その他保育園や社会養護下の若者支援施設でもアートの時間を設けています。2018年に当時の法人の理事長が、千葉アール・ブリュットセンターうみのもりのスタッフでもあり美術家のこまちだたまおさんと出会ったことをきっかけに、翌年から3施設で活動を開始。年々活動の場が広がりました。

一方、城西国際大学看護学部の教員の伊賀聡子さんは、学生の実習先として風の村が運営するスペースぴあ茂原の所長の小笹山徹也さんと関わりがありました。大学が「域学共創プロジェクト」という地域の価値の発掘や課題解決に取り組む全学部共通基盤科目を設けたことをきっかけに、伊賀さんから小笹山さんに「一緒に授業をしませんか」と声をかけたところ、「障害のある人が制作したアートを通じて地域の方々に伝える場、つながる場が欲しい」という小笹山さんからの提案で、この連携がスタートしました。

●内容

城西国際大学のキャンパス内にある美術館を会場に2023年11月7日から12日の6日間(内2日間は大学祭)、風の村が運営する5つの障害福祉サービス事業所の70名の参加者による展覧会を実施しました。来場者は600人弱。企画全体や展示方法の助言、指導などいわばキュレーターの役割をこまちださんが担当。プロジェクトに参加した11人の学生が、事業所での活動の様子を動画で撮影、編集して展覧会で上映したり、展覧会の搬入や片付けなどの協力をしました。



この取組において大切だった3つのポイント

●異なる立場の顔ぶれが協働したからこそその発見があった

組織も立場も異なる顔ぶれで実施したことで難しい面もあったが、アートや福祉の専門家がいて、学生がいて、大学が施設を無償で貸してくれた。立場の違う人たちができる時にできることをした。

●大学が関わることで福祉関係者以外にも開かれた

地域の社会福祉協議会等が主体に行う展覧会もあるが、関わる人も観にくる人も福祉の関係者が中心になることが多い。大学、とくに学生が間に入って実施することで、それが大きく変わった。

●アートとは何か、表現とは何かを考える

重症心身障害のある人が利用する施設の職員は、自分の意思を言葉で伝えることが難しい人の表現活動を支えることを通じて、アートとは何か、表現とは何かを考えるきっかけになっている。「そこが面白い」と職員は言う。

🔍 関係者それぞれの気付きや変化

●言葉の表現者(B型事業所利用者) 田辺悠二さん

(自分の詩を)みんなに見てもらおうと、自分も嬉しいというか。いろんな人に読んでもらいたい気持ちは強いので、発表する場を増やしてもらえるとすごく励みになります。

●美術家(株式会社いろだま、千葉アール・ブリュットセンターうみのもり 支援センター事業担当) こまちだたまおさん
作者ご本人のありのままを表現することが大事だと思っています。(関わっている8施設で)同じことはほぼしていないんです。支援者の方と相談して、それぞれの創作活動の方針を変えて、表現活動の場をつくっています。

●城西国際大学看護学部 教員 伊賀聡子さん

今後も、「インクルーシブ」に注力していきたいと思っています。障害の有無にかかわらず、より多くの皆様が快適に利用していただける、「開かれた大学」でありたいと改めて考える機会となりました。

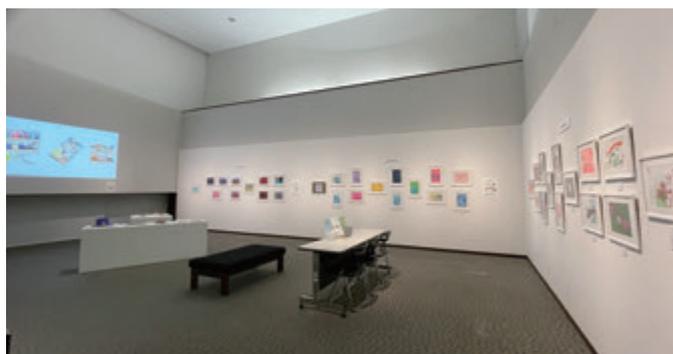
アール・ブリュット展を看護学部や福祉総合学部の授業材料として活用することで、学生たちの障害者理解を促進し、表現の多様性を学ぶ機会となりました。

●城西国際大学福祉総合学部 学部生 川上亜紀さん

障害のある方と直接関わりたい気持ちで授業を取りました。絵を描いている利用者さんの様子や、その作品が美術館で綺麗にライトアップされているのを見て、繋がれるのはアートの力だ、アートは橋渡し役だと思いました。

●重心通所さくら 所長 竹内耕さん

ケアとは支援を一方向的に「してあげる」ものではなく、支援者も「もらっている」ものがあり、双方向の関係だという考えに立ち返った感じがしています。だからこそ、ケアとアートの出会い、ケアの中にアートがある意味を感じます。



📌 取組によって生まれた成果や今後に向けた課題

●展覧会関係者への、より積極的な来場の呼び掛け

地理的な問題もあり、各事業所の作家本人が来ることが難しかったことと、大学の他の学科の皆さん、若い感性の子たち、各事業所の支援員や職員にも、もっと見に来てもらえると良かったです。

●県内の自治体、企業、大学などへの事業展開の協力

支援センターでは、県内の市の障害福祉課や一般企業からの展覧会の企画運営の依頼が増え、他の大学でもアール・ブリュットをテーマにした事業展開の構想に協力させていただくなど、社会が求めていることを感じます。

要所で関わる「ピンポイントの伴走支援」で実行委員会の主体的・継続的な活動を後押し

「フレンズアート展」

事例概要

主催団体 特定医療法人 南山会 峡西病院 精神科リハビリテーションセンター・フレンズ、フレンズアート実行委員会

協力団体 YAN 山梨アール・ブリュットネットワークセンター（以下、YAN）

11の施策との関連性

鑑賞	創造	発表	評価	権利保護	販売	交流	相談	人材育成	情報収集	連携協力
○	○	○					◎	○		

取組の概要

●きっかけ

コロナ禍で多くの展覧会が中止となった2020年。障害者文化展への出展を目標として制作に打ち込んでいた峡西病院 精神科デイケア利用者メンバーたちはやる気を削がれてしまいました。5名のメンバーは思わぬ事態に対し、「それなら自分たちで発表の場をつくろう!」と、職員とともにフレンズアート実行委員会を結成。ただ、アート展を開催するには何から着手すればよいか分からない状態だったため、YANに「共同」での開催を検討してほしいと相談を持ちかけました。

●内容

相談を受けたYANは、職員も限られている中で、一団体と「共同」でのアート展開催に対応する余裕があるのか? 中間支援の範囲を超えているのではないのか? しかし断ってしまっているのか? と悩みました。そこでYAN内部にて相談者であるフレンズアート実行委員会とどう関わり、対応するのかを協議。その後「ピンポイントの伴走支援」という形でのアドバイスや支援をすると決定しました。

1回目の開催場所にはYANから地域のショッピングモールを紹介。展示する作品の集め方や、多様な作品の展示方法のレクチャーなど、専門的アドバイスが行われました。第2回目の開催に向けては展示のアドバイスだけでなく、メンバーの体験を目的としてYANの担当者が創作ワークショップを催すなどより交流が深化することに。こうしてフレンズアート実行委員会の活動は継続され、2024年夏に第3回目の開催が予定されています。



この取組において大切だった3つのポイント

●ピンポイントの伴走支援という選択肢を持てた

限られたリソースの中で、中間支援を行うセンターとしてどこまで支援し役割を担うべきか悩むこともあったが、今回「ピンポイントの伴走支援」に初めて取り組むことができ、新しい選択肢となった。

●実行委員のやりがいと意欲が高まった

既存の展覧会に出品するのと違い、企画から広報、展示まですべて手掛けるのは大変。しかし、毎回できること、やりたいことが増え、大きな達成感があり、活動の継続と発展につながっている。

●主体性を促す支援のあり方に気づけた

支援センターとして、主体性をもって意欲的に取り組もうとする方の相談に対し、ただ答えを示すのではなく、相談者の求める答えにたどり着けるよう後押しし、一緒に考える時間が大事だと気づけた。

🔗 関係者それぞれの気づきや変化

●YANセンター長 瀧澤聡さん

今回の「ピンポイントの伴走支援」でYANは大きく変化。これまで踏み込めていなかった支援に関わることで、YANの活動範囲や職員の意識が広がったと感じています。言うなればフレンズアート実行委員会のみなさんに「YANがどうあるべきかの指標を教えていただいた」ということ。今回の気づきはYANにとっての財産となりました。

●フレンズアート実行委員会 メンバー

アート展を自分たちで開催することにより、「楽しい」という気持ちが「できる」に変わり、自信をもって作品を展示し、外の方との交流もできるようになりました。次はいつやるの?と声をかけてもらえるのがうれしいです。

●フレンズアート実行委員会 看護師 森澤千恵さん

これまで芸術に触れたこともなかったのですが、実行委員の一員として汗を流して取り組んでいます。展示が美しく完成した時の感動はひとしお。アートについても勉強し、みなさんの作品を新たな目線で見られるようになりました。メンバーさんの「自信がついた」の声を聞いて号泣するほど、フレンズアートは私の人生の宝です。



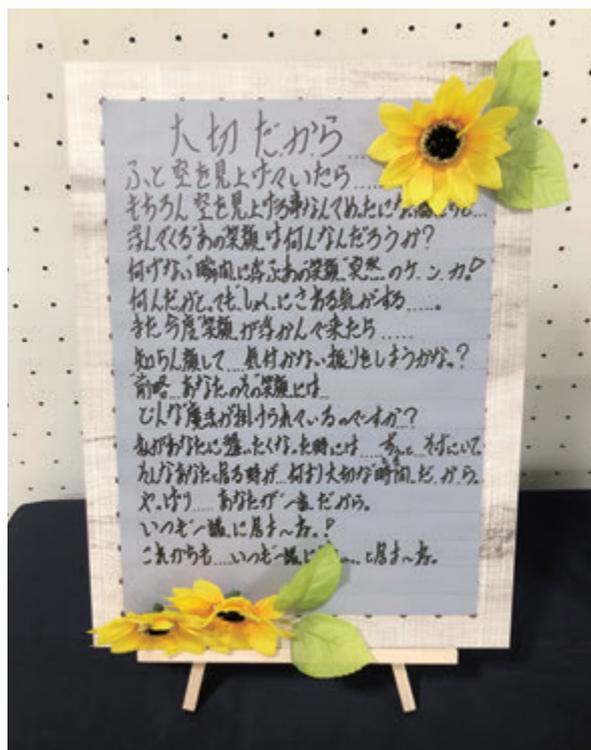
🔗 取組によって生まれた成果や今後に向けた課題

●実行委員会として成長、進化し続けている

YANの協力を得ながら、来場者との交流方法を工夫したり、視覚や聴覚の障害がある人にも鑑賞してもらえるよう体験会を実施したり、回を重ねるごとにアート展、実行委員会として進化し、エネルギーに活動を継続しています。

●フレンズアートの次なる存在が出てきてほしい

山梨県内で障害のある人が作品を発表できる場はまだ多くはありません。YANはフレンズアートの取組を見て「自分たちも!」と立ち上がる人々が現れることを願いながら、その湧き上がった思いに寄り添えるセンターでありたいと思います。



作品の二次利用の新たな可能性を開拓 社会的・経済的循環を目指す試み

「tomoniあたらしいものづくり[Make with 2023]」

事例概要

主催団体 岐阜県障がい者芸術文化支援センター
[TASCぎふ]

連携団体 パティスリー「TAKIMOTO」

11の施策との関連性

鑑賞	創造	発表	評価	権利保護	販売	交流	相談	人材育成	情報収集	連携協力
	○	○		○	◎	○				○

取組の概要

●きっかけ

TASCぎふでは、障害のある人が創作した絵画を二次利用できるよう、作品の画像データを収集、蓄積し、さまざまな利活用を行ってきました。そんな中、TASCぎふのアート利活用アドバイザーである古田菜穂子さんが、食品のように手軽に購入でき、経済的な循環を促せる新たなものづくりとして、ボンボンショコラの絵柄への活用を企画し、その価値を高めるため、岐阜県各務原市を拠点に世界的に活躍するパティシエの滝本真さんにコラボレーションを提案しました。

●内容

製菓用の転写シートを使い、作家が描いた花柄や幾何学模様などの絵柄を、滝本さんがプロデュースするボンボンショコラ（中に詰め物が入ったひと口サイズのチョコレート）の表面にプリントし、「トモニショコラ」と称してTAKIMOTOが製造、販売することとしました。作家への売上金の一部還元で滝本さんも合意し、販売価格や数量の決定、転写シートのサイズ、絵柄の配置や製作枚数の調整、作家の著作権への配慮など、商品の開発は滝本さんとTASCぎふ、そして障害のある作家の絵柄による転写シート製作は初めてという転写シートメーカーさんなどとの緊密な協働があって成立しました。また、「もっと人の目に触れてほしい」という滝本さんの提案で、名古屋市内のデパートでのバレンタインフェアでの販売が実現しました。売上の目標には到達することはできませんでしたが、テレビの複数のニュース番組にも取り上げられ、作家たちが滝本さんとともに岐阜県庁で知事への贈呈式を行うなど、大きな社会的な反応がありました。



この取組において大切だった3つのポイント

●買いたくなる、人の目に触れる可能性のある商品

二次利用を企画する際に、障害のある人の作品の価値を高めたいと考えた。食べたら消えてしまうチョコレートも、また買いたくなる可能性、いろいろなかたちで人の目に触れる可能性があることに着目した。

●二次利用を実現するための企画開発費の予算化

商品の販売に関わる直接的な予算はTAKIMOTOが受け持ったが、絵柄をチョコレートに二次利用するための転写シートの企画開発費や作家への謝金等はTASCぎふが予算を手当したことで実現できた。

●作品自体の魅力を損なわないように吟味

絵柄の提供元の作品は作家に著作権が帰属しており、絵柄の縦横比などを改変しないといった配慮や、多色で描かれていたオリジナル作品を白黒の転写シートに転載するため、絵柄の選定は吟味を重ねた。

🔍 関係者それぞれの気付きや変化

●TASCぎふ アート活用アドバイザー 古田菜穂子さん

障害のある作家の作品を包み紙のデザインなどに使うことは既にあることなので、誰もトライしていないことを滝本さんと実現したいと思いました。作品を使って製菓用の転写シートを作成するのは、おそらく初めての試みでしょう。岐阜県知事にトモニショコラを贈呈した際には、作品を提供してくれた作家7人のうち5人が誇らしげな表情で参加してくれました。一人の作家は「自分で自分の作品を食べるのは初めてだ」と感想を言ってくれました。

●パティスリー「TAKIMOTO」オーナー 滝本真さん

最初に相談を受けたとき、障害のある人との協働が、単に企業イメージをあげるためのアプローチではないかと思って慎重でした。ところが、実際に作品を見て「すごいなあ」と思って、文化として知ってもらうきっかけとして関わらせてもらいました。

●TASCぎふ スタッフ 井川佐知子さん

作品利活用の相談をされる企業のなかには、SDGs等、企業のイメージアップのみを考えた作品利用ではないのかと思うような方も中にはいます。ですが滝本さんは、施設見学や作家さんとお会いしたいと希望され、積極的に施設を訪れて関係を作り、今回の企画に参加をさせていただきました。

●TASCぎふスタッフ 中尾美優紀さん

絵柄を提供してくれた作家の中で、普段言葉をあまり発しない方が、自分の作品のショコラをみて「いい、いい」と2回言われたり、知事の贈呈式に出席された方が、「新しくブラウスを買ってきたんだ」と照れる姿を見せてくれたりと喜ぶ姿を見られました。



🔍 取組によって生まれた成果や今後に向けた課題

●製造販売の継続のための収支バランス

商品化自体はTASCぎふの予算で企画開発費がカバーされたことで実現できました。今後、作家へのデザイン使用料の還元を含めて、ビジネスとして継続し循環させるためには、より多くの売上が必要という課題も見えてきました。

●障害者の社会参加という中長期的視点の成果の言語化

TASCぎふでは、予算の投入と売上という結果だけではなく、作品の二次利用を通じて障害のある人の社会参加のモデルづくりが大事だと考えています。社会的価値と経済的価値の両面で中長期的な循環を目指しています。

障害の有無にかかわらず参加できる、アンデパンダン形式のユニークな場づくり

「藁工アンパン アートバザール」

事例概要

主催団体 藁工ミュージアム 分室

共催団体 アートセンター画楽

11の施策との関連性

鑑賞	創造	発表	評価	権利保護	販売	交流	相談	人材育成	情報収集	連携協力
		◎			◎	○	○	○	○	○

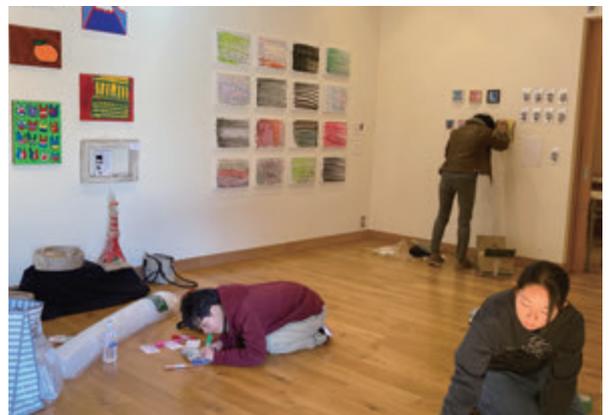
取組の概要

●きっかけ

高知県では30年近くにわたりスピリッツアート（高知県障害者美術展）が開催されていますが、作品展示の前には審査があります。また高知市展は無審査ですが展示は主催者側が行っています。そこで藁工ミュージアムとアートセンター画楽の間で「アーティスト自身が自立してつくる展覧会があったら面白そうだ」との声が出て、企画を立案・実行しました。さらに障害の有無によりアートに出会う機会、発表の機会に大きく違いがある現状を改善するような活動をしたいとも考えていました。

●内容

「藁工アンパン アートバザール」は2020年から開催されています。「アートだ!」と思う作品であれば、どのような形態・サイズでも販売できるバザールで、無審査で誰でも参加できるアンデパンダン（アンパン）展です。申込みさえいらず、展示する場所は早い者勝ち。例年、障害の有無にかかわらず様々なジャンルのアーティストが作品を発表・販売しており、点数や値段設定も自由というユニークな形態も特長です。2023年は11月17日～12月3日の会期で行われ、出展の4割程度が絵画作品で、そのほかにも立体、陶芸、写真、アクセサリー、洋服、CD、書籍類と実に多様。人もアートも分野をこえた交流ができ、お互いから様々なものを感じ、考え、学び合える刺激的な場が生まれました。初日には交流会、最終日にはパフォーマンスを自由に披露できるステージイベントや振り返り会も開催されました。



この取組において大切だった3つのポイント

●アンデパンダンというコンセプトで企画した

障害のある人とそうでない人が垣根をつくらずスペースを分け合い、譲り合いながら、展示の場をともに作る様子が見受けられた。主催者たちがこうあってほしいと願う社会を感じる事ができた。

●展示の方法をアーティストに委ねた

アーティスト本人、支援者、福祉施設・学校の職員などが展示や作品販売のノウハウを身につけることが目的。会場下見や相談会も実施し、不明なことは専門スタッフが細かく相談に乗った。

●展示だけでなく「販売」も重視している

作品販売による収入がアート活動につながることで、地方でアーティストとして生計を立てる素地をつくとともに、アートが生活の中の身近なものとして存在する土壌を培うことにつなげた。

🔍 関係者それぞれの気付きや変化

● 薫工ミュージアム 分室 松本志帆子さん

みなさん「展示すること」に対して成長されています。どのように展示すれば自分の作品がよく見えるか研究することで、販売にもつながるのではないのでしょうか。

● アートセンター画楽 代表 上田祐嗣さん

展示から販売まで自ら行うため、参加者が大きな成功体験を得ています。そして作品の価値・価格を自分で決め、発表する楽しさにも気づいています。今後も参加者と一緒にこの展覧会を育てていきたいです。

● 出展者 大江泰喜さん、大江泰代さん

「障害者限定ではない」「自由に値段を決められる」という点にひかれて参加。作品は命なので手元に置いておきたいのですが、作家となると譲ることも必要。作品に値段をつけるという過程で少しずつ「売ってもいいよ」という気持ちが出てきました。思ったより高く売れた作品もあり、今より自信をもっていいのかなと思えました。

● パフォーマンス参加者 YASULYさん

投げ銭のパフォーマンスライブは初めての体験。通りがかりの人が多いストリートライブと違い、観客がすでに温まっているのでとても励まされる環境で、アーティストとしての自信が持てました。参加費1,000円と低価格なのもうれしいです。



🔍 取組によって生まれた成果や今後に向けた課題

● 「アート作品を買う」という行為が年々身近になっている

回を重ねるごとに「アート作品を買う」ことまで楽しんでくださる方が増えています。アート作品を自ら決めた価格で購入してもらえることは今後のアーティスト活動の資金になり、アーティストの自信にも繋がります。

● 作品がこれ以上、増えていった時にどう対応するのが課題

終盤に作品を搬入した人はよい展示スペースを見つけられず、悩む様子が見受けられました。出品数やサイズの縛りもないので、展示場所のアドバイスができるバランス感覚を備えた人材の育成が必要だと考えています。

芸術と福祉の分野をつなぐ 現場での研修を通じた顔の見える関係づくり

「芸術×福祉 九州ネットワーク会議」

事例概要

主催団体 九州障害者アートサポートセンター(以下、KDA)、国際障害者交流センター(以下、ビッグ・アイ)、アクロス福岡

連携団体 九州各地の障害者芸術文化活動普及支援センター、文化施設

11の施策との関連性

鑑賞	創造	発表	評価	権利保護	販売	交流	相談	人材育成	情報収集	連携協力
○		○				○	○	○	○	◎

取組の概要

●きっかけ

2018年、KDAが九州ブロックの障害者芸術文化活動広域支援センターとして設立されました。同じ年にビッグ・アイの鈴木京子さんが公立文化施設協会九州地区のアートマネジメント研修会に講師として招かれたことがきっかけで、ビッグ・アイが企画制作した知的、発達障害児(者)を対象とした体験プログラム『劇場って楽しい!』を、2019年に熊本県立劇場、2020年にアクロス福岡が主催し実施。一方、KDAの樋口龍二さんは、アンケート調査を通じて文化施設における障害者への対応が進んでいないことから、福祉と文化が互いに学び合うネットワークを考えていた時に、鈴木さんから文化施設の現場での事前研修を組み合わせたネットワーク会議の提案がありました。

●内容

2021年度に九州各県の支援センターと文化施設が集まり、障害のある人たちが文化施設を気軽に利用できるようになることを目的としたネットワーク会議を4回開催。芸術活動の発表の場の開拓や鑑賞支援などについて学び合う場を構築し、全国各地の事例紹介、障害特性と障害種別に応じた配慮や広報、情報発信の工夫などを学び、意見や情報を交換しました。会議と研修の日程は、アクロス福岡が継続的に実施している『劇場って楽しい!』の公演に合わせて設定し、参加施設数は、2021年が5館、2022年が8館、2023年が16館と増えています。ネットワーク会議で九州各県の福祉と文化の関係者が出会い、文化施設の事業へ支援センターを通じて障害者に参加してもらったり、広報に協力してもらったりする動きが生まれています。



この取組において大切だった3つのポイント

●勤務施設ではない会場での現場研修が気づきを与えた

自分が勤務する施設ではない会場で現場の研修をすることで、お客様の目線で参加することができ、気づきを共有することができた。文化と福祉での「普通」が違うことを感じた。

●運営組織の縦割りを越えて全体の意識が変わった

アクロス福岡や熊本県立劇場では、事業の企画担当だけでなく、総務、施設管理、受付スタッフなども一緒に体験したことで意識が変わってきている。小さな気づきから障害者との対応の改善が見られる。

●人、予算、ノウハウといった足りないものを補い合う

文化施設が障害者への対応を進めてこれなかった理由は、人、予算、ノウハウの不足。ネットワークによって、学びながら人を育て、費用を抑え、ノウハウを共有すると、できなかったことができるようになる。

🔍 関係者それぞれの気付きや変化

●ビッグ・アイ プロデューサー 鈴木京子さん

体験プログラム『劇場って楽しい!』を全てパッケージにしてビッグ・アイが行うと、その地域にノウハウが根付かないので、研修と合わせて実施するようになりました。九州ネットワーク会議では、劇場主体で地域に障害のある人が参加できる環境づくりを広げるために、ネットワークを通じて深く繋がる仕組みが作れたらいいと思います。

●九州障害者アートサポートセンター 広域センター事業担当 樋口龍二さん

最初の頃は、文化施設から「障害のある方から配慮できていないところをチェックされるのでは」と敬遠されていたこともありましたが、今では自分事として関わる大切さを体験を通じて学んでもらっています。

●アクロス福岡 ディレクター 添嶋麻里さん

2020年に策定された福岡県文化芸術振興条例では「障がいのある人の文化芸術活動の推進」が掲げられました。県立施設であるアクロス福岡にとって大きな話で、このネットワーク会議に福岡県内の会館が多く参加しました。障害者だけでなく子ども連れへの対応にも繋がられると評判がいいです。

●熊本県立劇場 事業グループ主任 黒木正美さん

熊本県内にもネットワークを広げたいと考えています。職員数が少なく予算が限られているホールだと、こうした事業には単館では取り組みにくいですが、県立劇場の事業で市町村のホールと一緒に取り組めることが最大のメリットではないでしょうか。



📁 取組によって生まれた成果や今後に向けた課題

●ネットワークをきっかけにした企画の展開や地理的な広がり

熊本県立劇場では、今年度より障害者向けのダンスのワークショップにも新たに取り組みました。令和元年度から継続している知的・発達障害児者向けの鑑賞型公演では、県内に広めるために天草市のホールと協働での実施を予定するなど、企画内容の展開や地理的な広がりが見られます。

●ネットワークが広がる一方で、意識や意欲の地域差を埋めていきたい

福岡や九州でのネットワークは参加施設の数が増えて広がっている一方で、福祉の分野にもより広げ、自主性を育てることが求められています。ただ、九州内で参加の少ない地域もあり、意識や意欲の濃淡の地域差を埋めていく必要があります。

小さな気付きからはじまった、多様な主体との協働による5年間のチャレンジ

「視覚障がいと鑑賞について」(対話型アート鑑賞ガイドの作成)

事例概要

主催団体

障がい者の作品鑑賞について考える会
(宮崎県障がい者芸術文化支援センター、視覚障害者、宮崎県立視覚障害者センター、宮崎県立美術館、高鍋町美術館、特別支援学校教員、Fablab Miyazaki β)

11の施策との関連性

鑑賞	創造	発表	評価	権利保護	販売	交流	相談	人材育成	情報収集	連携協力
○						○		○	○	◎

取組の概要

●きっかけ

2019年、宮崎県障がい者芸術文化支援センターの岩切明日香さんが初仕事として手がけたアート作品展に、視覚障害のある人とヘルパーさんが来訪。その際、視覚障害のある人が作品に触りながら鑑賞されていました。その作品展では展示物への接触を想定しておらず、岩切さん自身は何と声をかければいいのか迷い、その場は見守るしかなかったそうです。作品に「触る」鑑賞体験は特別な機会として設けられることが多く、岩切さんはこの経験から、視覚障害のある人が日常的にアートを楽しめるよう、作品に「触る」、作品の解説を「聞く」以外の選択肢をつくりたいと模索がスタート。視覚障害のある人と、多様な分野の専門家が集った、「障がい者の作品鑑賞について考える会」が発足されました。

●内容

考える会では対話型鑑賞*の先行事例を参考にしながら独自の鑑賞ガイド作成を進め、2024年、視覚障害のある人と同行者(ヘルパーや家族、友人)がともにアートを楽しむための「見えない人/見えにくい人と一緒に楽しむ対話型アート鑑賞ガイド」を発刊しました。このガイドは、「触る」ことができない展示環境においても、視覚障害のある人もない人も対話を通じて日常的にアート鑑賞を楽しめるような対話の手順とヒントが載っています。ここに至るまでの5年間、ゆるやかなお茶会で視覚障害のある人の意見を聞き、視覚支援学校訪問、年2回の対話型鑑賞会の開催、会議を重ねてきました。今後はさまざまな場所でこのガイドが活用できると期待が集まっています。

*対話型鑑賞…キュレーターが一方向的に作品の解説をするのではなく、スタッフと来館者らが互いに作品の様子や感想を伝え、対話をしながら作品への考えを深めていく鑑賞方法。



この取組において大切だった3つのポイント

●会には多様な立場・視点を持つ人が参加

視覚障害のある人、活動を「おもしろそう」と感じた人、学芸員などがそれぞれの立場・視点から率直に意見交換をした。会議だけでなくメールや電話、SNSグループや懇親会でも気軽に意見交換を行った。

●時間をかけてゆっくりとガイドを制作

最初はゆるやかなお茶会を開き、会のメンバーが知り合いになり、信頼関係を築くところからスタート。視覚障害のある人の不満・疑問・不安を聞き取れる環境づくりを大切に、多くの意見を吸い上げていった。

●同行者も以前より楽しめるようになること

以前は同行者がアート作品のキャプションを読み上げた後に、何をすればいいのか戸惑う場面もあった。ガイドをもとに「対話型鑑賞」をすることで双方にとって楽しく豊かな時間になった。

🔍 関係者それぞれの気付きや変化

●特別支援学校教員 森山恭子さん

試作中のガイドには私たちの想いと情報を詰め込みすぎ、ガイドを使う人が理解するのに時間がかかっていました。そこで情報を絞り、見える人・見えない人・見えにくい人それぞれに向けて整理し直すなど工夫を重ねました。また以前は「博物館は触れるけれど、美術館は触れないからつまらない」という声に胸を痛めていましたが、対話型鑑賞が広がることで誰もが美術館を楽しめると思っています。

●視覚障害者 鶴大輔さん

私は中途失明なので以前は美術館に通い、見えなくなつてからは視覚障害者センターでアートに触れるなどの鑑賞をしていました。そして今回初めて「対話を通じてアートを鑑賞すること」を体験。「見えないから楽しめない」と決めるのはもったいないと気づきました。ほかの視覚障害者の方にも対話型鑑賞でアートを楽しもうと伝えていきたいです。

●Fablab Miyazaki β 鈴木ゆかりさん

ガイド制作を通して対話型鑑賞の存在を知り、美術鑑賞の仕方自体への認識が変わりました。印象に残っているのは高鍋町美術館で高校生と対話型鑑賞をした時。自分が感じた事や想いの伝え方に面白さと楽しさをとても感じました。障害のあるなしに関わらず対話と鑑賞をたくさんの方が体験すべきだと感じました。



📌 取組によって生まれた成果や今後に向けた課題

●美術館にもいい影響を及ぼし、変わるきっかけに

ガイド作成にあたった美術館関係者は「鑑賞ってなんだろう?」と捉え直す機会となったといいます。これから美術館にも新しい風が吹き、障害者もアートを楽しめる環境が増えていくことに期待を寄せています。

●今後は対話型鑑賞ガイドの活用を広げていく

ガイドは県内公共施設等に配布され、鑑賞会を通して普及が進んでいく予定。支援センター主催の作品展での活用も検討中です。また2023年度の活動報告書とともに全国の支援センターにも配布を予定しています。

取組事例の特徴

最後に、第2期の基本計画を踏まえながら8つの取組事例の特徴を整理します。

障害のある人の主体性や自発的な意志の尊重

第2期の基本計画の目標1では「障害者による幅広い文化芸術活動の更なる促進や展開」を掲げており、活動の裾野の拡大や活動しやすい環境づくりを進めることとしています。こうした裾野の拡大や環境づくりを進める上で、取組事例（ex. 福島、宮城、山梨）では、障害のある人の主体性を引き出し、丁寧に伴走しながら自発的な意志を尊重しています。

現場での協働から生まれる信頼関係、連携

第2期の基本計画の目標2では「文化施設及び福祉施設等をはじめとした関係団体・機関等の連携等による、障害者が文化芸術に親しみ、参加する機会等の充実」を掲げています。取組事例（ex. 千葉、宮崎）では、具体的な活動の現場で、組織や立場を越えた協働が行われ、そこで生まれた信頼関係によって、人材やノウハウの不足を補い合っていました。そうした信頼関係を基盤とした連携から、基本計画の目標3の「地域における障害者による文化芸術活動の推進体制の構築」につながるような、文化や福祉等の分野や地理的な距離を越えた取組（ex. 福岡）にも発展しています。

障害者による文化芸術活動の多様な価値の議論

基本計画に位置付けられた11項目の施策の中で、第1期では取組が少なかった「芸術上価値が高い作品等の販売等に係る支援」に関連する事例（ex. 岐阜、高知）を見ると、作品の販売や二次利用のアプローチ、求める成果の考え方も様々であることが分かります。第2期の基本計画の視点2に「文化芸術が有する本質的価値、社会的・経済的価値といった（中略）多様な価値を幅広く考慮し、その評価のあり方を固定せずに議論を続けていくこと」とあるように、具体的な取組を通じて様々な関係者と対話することが肝要です。

参考資料

本冊子の作成にあたって参考とした文献とWEBサイトです。(なお、URLは2024年3月時点のものです)

文献

平成30年度障害者芸術文化活動普及支援事業連携事務局『平成30年度 障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書』(2019年)
令和元年度障害者芸術文化活動普及支援事業連携事務局『令和元年度 障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書』(2020年)
令和2年度障害者芸術文化活動普及支援事業連携事務局『令和2年度 障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書』(2021年)
令和3年度障害者芸術文化活動普及支援事業連携事務局『令和3年度 障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書』(2022年)
令和4年度障害者芸術文化活動普及支援事業連携事務局『令和4年度 障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書』(2023年)

WEBサイト

「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画(第2期)」(令和5年3月)、文部科学省・厚生労働省、2024年3月25日確認。
(<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/001080256.pdf>)

有識者ヒアリング

下記の方々に、本事業の調査設計や調査結果について検討する有識者ヒアリング(2023年8月～2024年3月、全2回)にご協力いただきました。なお、所属は2024年3月時点のものです。

小川 智紀	特定非営利活動法人アートNPOリンク 事務局長
小野田 由実子	法政大学現代福祉学部福祉コミュニティ学科 助教
長津 結一郎	九州大学大学院芸術工学研究院 准教授
山田 創	滋賀県立美術館 学芸員

アドバイザー

吉本 光宏	合同会社文化コモンズ研究所 代表・研究統括
-------	-----------------------

おわりに

この事例集(「障害者による文化芸術活動をもっと広げる8つの取組事例集」)は、2023年6月から実施された令和5年度障害者総合福祉推進事業「障害者による文化芸術活動の幅広い活動を支援するための現状調査と研究」の成果をもとに制作いたしました。

事例集の制作にあたっては、文献調査や全国の都道府県及び支援センターを対象としたアンケート調査に加え、広域センターや有識者のみなさんとの意見交換を実施し、第2期の基本計画中に求められる取組の方向性などについて伺いました。また、8つの事例については、該当する取組に関わった多様な関係者(ステークホルダー)のみなさんからお話を伺い、さまざまな面から各取組のプロセスや成果をコンパクトにまとめるように努めました。

ここにすべての方のお名前をあげることはできませんが、この場を借りて、みなさんに心よりお礼を申し上げます。

この事例集が第2期の基本計画中における障害者による文化芸術活動の広がりの一助になることを願ってやみません。

みんなどんなことやっているの？

障害者による文化芸術活動をもっと広げる 8 つの取組事例集

発行日 2024 年 3 月 31 日
企画編集・発行 NPO 法人ドネルモ
〒 812-0026 福岡市博多区上川端町 9-35 リノベーションミュージアム冷泉荘 B45
Tel&Fax : 092-409-5762 Email : donnerlemot@gmail.com
<https://donnerlemot.com/>

発行責任者 宮田 智史 (NPO 法人ドネルモ 事務局長)
研究メンバー 大澤 寅雄 (NPO 法人ドネルモ 特別研究員)
宮田 智史 (NPO 法人ドネルモ 事務局長)
古賀 琢磨 (NPO 法人ドネルモ スタッフ)
櫻井 香那 (NPO 法人ドネルモ スタッフ)
ライター 西村 里美 (H&Her.)
デザイン 長末 香織

補助 本書は、令和 5 年度障害者総合福祉推進事業「障害者による文化芸術活動の幅広い活動を支援するための現状調査と研究」の成果として作成しています。

* 本書は、出典を明記することを条件に利用（転載、コピー、共有等）を許可します。